慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	1950年10月の中国人民志願軍の朝鮮出兵とトルーマン政権内での原爆投下論争についての一考察
Sub Title	
Author	斎藤, 直樹(Saito, Naoki)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2012
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 人文科学 (The Hiyoshi review of the humanities). No.27 (2012.) ,p.119- 150
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10065043-20120530-0119

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

1950年10月の中国人民志願軍の朝鮮出兵とトルーマン政権内での原爆投下論争についての一考察

斎　藤　直　樹

An Observation on the Dispatch of the Chinese People's Volunteer Army in October of 1950 and the Subsequent Debate on the Drop of Atomic Bomb in the Truman administration.

This article is designed to examine the dispatch of the Chinese People's Volunteer Army by Mao Zedong's leadership and the subsequent debate on the drop of atomic bomb in the Truman administration.

はじめに
⑴　中国人民志願軍の朝鮮出兵
⑵　米国内の原爆投下論争
むすびにかえて――原爆投下への傾斜とマッカーサーの解任

はじめに

本稿は，一九五〇年一〇月一九日に毛沢東指導部が中国人民志願軍の朝鮮出兵を決断するに至った経緯を考察すると共に，同志願軍の出兵が米軍優位であった戦局を一転させることになった結果，トルーマン政権内でこれに対抗するため原爆の投下を巡る熾烈な論争が繰り広げられた過程につ

いて論及する。

(1) 中国人民志願軍の朝鮮出兵

1．毛沢東指導部による介入の警告

後述のとおり，「抗美援朝」の御旗の下で一〇月一九日に鴨緑江を渡った中国人民志願軍の大軍が韓国軍と衝突する直前にあった。しかし朝鮮出兵に至る道筋は紆余曲折を経てのことである。そもそも毛沢東や中国共産党幹部達にとって隣の朝鮮半島での混乱や不穏な情勢など蒋介石率いる宿敵の中国国民党勢力の駆逐に比べれば，はるかに優先順位の低い課題に過ぎなかった。一九二一年の結党以来，死闘を繰り返してきた中国国民党勢力を四九年一〇月までに台湾へ放逐したとはいえ，まだ完全に駆逐するまでには至ってはおらず，未完の課題であった。それに比べれば，スターリンの傀儡の金日成による韓国侵攻計画への支援などせいぜい二の次の事項に過ぎなかった。しかしスターリンが金日成の軍事侵攻計画を承認したことで，ソ連からの支援を是が非でも必要とする毛沢東は侵攻計画の了解を迫られた。とはいえ，金日成だけでなく毛沢東達にとっても，米国の介入の可能性はあくまで低く，そのときにどう対応するかは，言わば仮説上の問題であった。ところが，朝鮮人民軍の軍事侵攻に対しトルーマン政権が予想外にも韓国防衛に向け直ちに大規模派兵を決めたことは金日成だけでなく，毛沢東や中国共産党幹部達にとっても現実的な対応を余儀なくされる事態を引き起こした。

しかも台湾の中国国民党政府が三三〇〇〇名の派兵をトルーマンに直訴したことは，雲行き次第では米軍の支援を受けた国民党政府軍が米軍と共に朝鮮半島から中国領内に雪崩れ込みかねない可能性を示唆した。国民党政府軍の派兵計画はトルーマンによって拒否されたとはいえ，台湾防衛のためトルーマンが直ちに台湾海峡に米第七艦隊の派遣を決めたことで，台湾の解放は事実上，頓挫した。こうした進捗の下で，毛沢東や党幹部達は中朝の国境地帯の防御に神経を集中した(1)。

朝鮮出兵は思いの他，重荷であったが，マッカーサーによる起死回生の仁川上陸作戦とそれに続くソウル奪回は毛沢東や党幹部達を激しく苛立たせた。しかも，国連軍が北緯三八度線を突破し北進を続けるものならば，遠からず平壌も陥落し，中朝国境を流れる鴨緑江を渡り中国へと雪崩れ込んでくるのではないかと危惧した。これに対処するためには朝鮮出兵に踏み切らざるをえないとの認識に近づいた。

しかし，独自の空軍を持たない中国が膨大な数の地上軍を出兵できるとしても，米軍機による激しい爆撃や機銃掃射にさらされることは目にみえている。これを阻止するためにはソ連軍機による空中支援が不可欠となる。そうしたことから，朝鮮出兵に踏み切るためにはなんとしてもソ連軍機による空中支援の確約をスターリンから頂く必要があった。もしも空中支援が確保できないのであれば米軍機の格好の餌食になりかねず，これを憂慮する軍部や党内の幹部達の猛烈な反発を免れない。

こうした認識に立ち，毛沢東や周恩来は韓国侵攻直後の七月上旬から朝鮮出兵の可能性を示唆すると共に，朝鮮出兵に応じた際の中国軍への空中支援の提供についてスターリンに求めていた。七月二日のロシュチン駐中国・ソ連大使との会談で，東北地域に展開する中国第三軍所属の一二万もの兵を派遣する用意があるが，中国軍の防御のため空中支援を頂くよう望むと周恩来はロシュチンに伝えた(2)。これに対し，スターリンは七月五日の周恩来宛電報で，もしも米軍が北緯三八度線の軍事境界線を越境する事態が起きれば，中朝国境へ九個師団を直ちに派遣して頂きたいと前置きし，これが適うのであれば，派遣師団の防御のため空中支援を提供する意思のあることを示唆した(3)。

---

(1)　この点について，Shen Zhihua, "Sino-North Korean Conflict and its Resolution during the Korean War," *Cold War International History Project (CWIHP) Bulletin*, 14/15 (Winter 2003/Spring 2004.) p. 10.

(2)　周恩来・ロシュチン会談について，*op. cit.*, "Sino-North Korean Conflict and its Resolution during the Korean War," p. 10.

(3)　周恩来宛のスターリン電報について，Telegram from Stalin to Roshchin,

その後，毛沢東や党幹部達の予想は現実のものとなった。九月一五日に米軍は仁川上陸作戦を敢行し，これにより形勢は一挙に逆転し，一九日までにソウルは奪還された。窮地に立たされた朝鮮人民軍は敗残兵がごとく三八度線以北に向けて潰走を始めた。そして一〇月一日にマッカーサーは金日成に対し無条件降伏を要求する最後通告を突きつけた。この日は中国の国慶節に当たった。しかも中華人民共和国の建国からちょうど一年後の国慶節であった。国慶節の記念行事の席上で，周恩来は三八度線を国連軍が突破すれば，朝鮮出兵に応じざるをえないと断言した。周恩来曰く，「中国人民は侵略を許容しないし，帝国主義者達が勝手に隣国の領土へ侵入すれば，また座視することもない。」[4]毛沢東指導部は予想もしなかった朝鮮出兵という限りなく重い決断を迫られていた。

一〇月三日，周恩来はパニッカー（K. M. Pannikar）駐中国・インド大使を介し，米国政府に向け中国の介入の意思を伝えた。それによれば，国連軍が北緯三八度線を越境するのであれば，中国は出兵に踏み切る。他方，三八度線を越境するのが韓国軍だけであれば，その限りではない。翌日，パニッカーはイギリス大使を介し周恩来の伝言をトルーマン政権に伝えた[5]。しかし日頃から反米・容共の人物であると目されたパニッカーの言葉の信憑性ははなはだ疑わしいとされ，パニッカーを介した周恩来の警告を政権が真剣に受け止めることはなかった。

July 5, 1950, sending message for Zhou Enlai. For the full text see Kathryn Weathersby, "New Russian Documents on the Korean War," *CWIHP Bulletin* 6/7, (Winter 1995/1996.) p. 43. (cited in *op. cit.*, "Sino-North Korean Conflict and its Resolution during the Korean War," p. 10.)

(4) 国慶節での周恩来の警告について，James Schnabel, *United Army in the Korean War, Policy and Direction: The First Year*, Chapter XI: The Invasion of North Korea, Center of Military History, United States Army, Washington, D.C., (1992.) p. 197.

(5) 一〇月三日の周恩来による警告について，K. M. Pannikar, *In Two Chinas: Memoirs of a Diplomat*, (London: Allen and Unwin, 1955.) pp. 109–11. (cited in o*p. cit., United Army in the Korean War, Policy and Direction: The First Year*, Chapter XI: The Invasion of North Korea, pp. 197–198.)

2．窮地の金日成と毛沢東への支援願い

この間の九月二八日に朝鮮労働党政治局の緊急会議が開催された。ソウルが奪還された以上，米・国連軍による北緯三八度線の越境は時間の問題となった今，朝鮮人民軍の残存勢力だけでは米・国連軍への対抗など，絶望的であるとの悲壮な共通認識が表明された(6)。一〇月一日にマッカーサーに無条件降伏を突きつけられ，窮地に陥った金日成と朝鮮労働党幹部達はスターリンと毛沢東の両巨頭へ派兵を懇願する書簡を送付することを決めた。それでも送付先の一番目はスターリンであり毛沢東ではなかった。即日，藁にも縋る思いの金日成達はスターリンに緊急の派兵を頼み込んだのである(7)。しかしスターリンからの支援を心待ちにしていた金日成に届いたのは毛沢東に派兵を求めよという冷淡なものであった(8)。これは一九五〇年四月のスターリン・金日成会談でアジア情勢に精通している毛沢東へ派兵を求めるようにスターリンが断じたことからして別段，驚くことではなかった。この場に至っても毛沢東へ派兵の申し出を行うことを逡巡していた金日成であったが，受け入れる以外に金日成に手立てはなかった。一〇月一日の毛沢東への書簡の中で，中国人民解放軍の朝鮮出兵を金日成はついに願い出た(9)。

---

(6)　九月二八日の朝鮮労働党政治局の緊急会議について，*op. cit.,* “Sino-North Korean Conflict and its Resolution during the Korean War,” p. 11.

(7)　スターリンへの金日成の支援懇願について，Alexandre Y. Mansourov, “Stalin, Mao, Kim, and China’s Decision to Enter the Korean War, September 16–October 15, 1950: New Evidence from the Russian Archives,” *CWIHP Bulletin*, 6/7, (Winter 1995/96.) pp. 97–98.; and *op. cit.,* “Sino-North Korean Conflict and its Resolution during the Korean War,” p. 11.

(8)　金日成宛のスターリン電報について，Telegram from Stalin to Shtykov and Matveev, 1 October,1950. Collection of Documents from the Archive of the President of the Russian Federation, obtained by *CWIHP* in 1995 and available at the National Security Archives, Washington, D.C. (cited in *op. cit.,* “Sino-North Korean Conflict and its Resolution during the Korean War,” p. 11.)

(9)　金日成による毛沢東への派兵要請について，*op. cit.,* “Sino-North Korean

しかし，毛沢東や党幹部達が朝鮮出兵という最終結論に至るまでは多くの紆余曲折を経なければならなかった。それまでの非礼かつ傲慢な金日成の態度に毛沢東が怒っていたからではなかった。朝鮮出兵が中国にとって得策なのかそれとも愚策なのか，毛沢東と党幹部達は真剣に議論を重ねざるをえなかった。空軍を持たない中国にとってソ連軍機による空中支援が確保できないのであれば，朝鮮出兵は壊滅的な失敗に帰す可能性が高いことは，毛沢東も党幹部達も正確に認識していたからである。

一〇月三日から七日まで，朝鮮出兵について中国共産党政治局拡大会議が北京で数度にわたり開催された。参加幹部の中でとりわけ朝鮮出兵に慎重姿勢を表明したのは林彪（リン・ピョウ）や高崗（コウ・コウ）達であった。しかし，毛沢東は慎重な党幹部達の反対意見をねじ伏せた。毛沢東曰く，朝鮮問題は中国の安全保障問題であるだけではなく，アジアでの社会主義陣営と帝国主義者陣営の対立構造と深く係る。かりに火力や装備で劣ったとしても，圧倒的な兵員数，兵士達の士気の高さ，出兵への中国人民からの支援といった点で，中国は米帝国主義者達に決して劣ってはいない。結局，拡大会議を通じ朝鮮出兵についての毛沢東の決断が正式に承認されると共に，中国人民志願軍総司令官として彭徳懐（ホウ・トクカイ）が選任されることになった[10]。

Conflict and its Resolution during the Korean War," p. 11.; *op. cit.,* "Stalin, Mao, Kim, and China's Decision to Enter the Korean War, September 16–October 15, 1950: New Evidence from the Russian Archives." p. 98.; and Zhang, "Before and After Peng Dehuai's Appointment to Command the CPV in Korea," pp. 123–124. (cited in Chen Jian, *The Sino-Soviet Alliance and China's Entry into the Korean War,* Cold War International History Project, Woodrow Wilson International Center for Scholars, Washington, D.C., (June 1992.) p. 29.)

⑽　朝鮮出兵の可否を巡る中国共産党政治局拡政治局会議について，Zhang, "Before and After Peng Dehuai's Appointment to Command the CPV in Korea," pp. 133–136.; Yao, Cong Yalujiang dao banmendian, pp. 23–24; see also CCP Central Committee, "The Guideline for Interpreting the Current Situation," October 26, 1950, Party History and Party Constitution Institute of

朝鮮戦争への参戦を毛沢東や党幹部達が決断したものの，中国人民志願軍の泣き所は米軍機による容赦ない爆撃と機銃掃射にさらされる可能性であった。これは一〇月一五日の太平洋のウェーク島会談で強気一辺倒のマッカーサーがトルーマンを諭した志願軍の弱点と重なる。ソ連軍機による空中支援の確保が不可欠であるが，七月五日のスターリンの電報ではその可否が曖昧であり，このためスターリンから直接回答を得る必要があると，毛沢東は判断した。このため一〇月九日，一〇日にクリミヤ半島の黒海畔の別荘で急遽，持たれたのがスターリン・周恩来会談であった[11]。会談は九日午後七時から翌朝の午前五時まで及んだ。会談にはたまたま療養のためソ連滞在中であった林彪も加わった。ところが，米軍との大規模軍事衝突だけは回避したいスターリンはソ連軍機の提供には応じる気配がなかった。二〇個師団分の軍事物資の提供にはやぶさかではないとスターリンは善処したものの，ソ連軍機の提供には応じられないと翻った。周恩来はスターリンに幾度も再考を促したが，スターリンの気持ちは固かった。このため周恩来は会談後直ちにその旨を毛沢東と党幹部達に向け打電し，その上で，朝鮮出兵についての決定を再考するよう求めたのである[12]。

3．中国軍人民志願軍の朝鮮出兵の正式決定

スターリンの冷淡な返答は毛沢東と中国共産党幹部達に深刻な難題を突

---

the National Defense University, eds., Zhonggong dangshi jiaoxue cankao ziliao (Reference Materials for Teaching CCP History), The Press of National Defense University, 1986, Vol. XIX, pp. 211–213. (cited in *op. cit., The Sino-Soviet Alliance and China's Entry into the Korean War,* p. 30.)

⑾　周恩来・スターリン会談について，Chai and Zhao, Banmendian tanpan, p. 83.; and Zhang, "Before and After Peng Dehuai's Appointment to Command the the CPV in Korea," p. 147. (cited in *op. cit., The Sino-Soviet Alliance and China's Entry into the Korean War*. pp. 30–31.)

⑿　この点について，Zhang Xi's "Before and After Peng Dehuai's Appointment to Command the Troops to Korea," pp. 147–148. (*op. cit., The Sino-Soviet Alliance and China's Entry into the Korean War,* p. 31.)

きつけた。ソ連軍機による空中支援が確保されない状況の下で，出兵に踏み切るべきなのか否か。一〇月一二日，毛沢東は朝鮮出兵には躊躇せざるを得ないと否定的な考えをスターリンに示した[13]。これを受け，スターリンは金日成に対し北朝鮮領内から残留部隊を避難させるよう命令を下した。金日成にとって避難命令に恭順することは事実上の北朝鮮の滅亡を意味した。金日成はスターリンの避難命令に驚愕したが，これまた了承する以外に選択の余地はなかった[14]。

ところが，ここで事態は急転回する。一〇月一三日にその可否について中国共産党政治局の緊急会議が召集された。毛沢東が導いた結論はそれでも介入に踏み切るというものであった[15]。政治局会議の後，毛沢東は直ちに周恩来に打電した。毛沢東によれば，朝鮮出兵は中国に留まらず朝鮮半島，東側陣営，全世界の共産主義陣営にとって有利に働く。もしも中国が志願軍を出兵せず，鴨緑江への進撃を敵側に許すことになれば，敵側はさらに傲慢となるであろう。そうなれば，満州は敵に奪われ，南満州の電力も敵によって握られる。こうした視座に立ち，出兵にこそ価値があるのであり，出兵しないのは有害でしかない[16]。

同じく一三日に毛沢東から朝鮮出兵に踏み切るとの判断を聞いたスター

---

⑬ 毛沢東による朝鮮出兵不可回答について，*op. cit.,* “Stalin, Mao, Kim, and China’s Decision to Enter the Korean War, September 16–October 15, 1950: New Evidence from the Russian Archives.” p. 104.

⑭ この点について，Ciphered Telegram from Shtykov to Fyn Si (Stalin) October 14, 1950. (cited in *op. cit.,* “Stalin, Mao, Kim, and China’s Decision to Enter the Korean War, September 16–October 15, 1950: New Evidence from the Russian Archives.” p. 104.

⑮ 毛沢東の下した朝鮮出兵の結論について，Zhang, “Before and After Peng Dehuai’s Appointment to Command the CPV in Korea,” p. 150. (cited in *op. cit., The Sino-Soviet Alliance and China’s Entry into the Korean War,* p. 32.)

⑯ 毛沢東による周恩来宛電報について，Mao Zedong to Zhou Enlai, October 13, 1950, Mao Zedong junshi wenxuan, p. 347; Mao Zedong wengao, I, p. 556. (cited in *op. cit., The Sino-Soviet Alliance and China’s Entry into the Korean War.* p. 32.)

リンは大いに驚くと共に喜びを隠しえなかった。翌日の一四日，金日成宛の電報で，避難命令を直ちに取り消し，北朝鮮にとって好ましい決定がなされたと金日成に伝えた[17]。ただし，難しい付帯条件を金日成にスターリンは付けた。中国人民志願軍出兵に伴う諸々の課題について中国の同志達と共に取り組むこととあった。

他方，スターリンとの重苦しい会談を終えた周恩来は一七日に急いで帰国した。毛沢東としては周恩来からスターリンとの会合の報告を受けるまで最終決定を行うことを躊躇った。一八日の会議の席上，軍事物資や弾薬の提供を約すると共に，中国領土の防空に努めるとの確約を得た一方，ソ連空軍機は残念ながら，米軍との戦闘には加わることはないと周恩来は報告した[18]。周恩来の報告を受け，中国人民志願軍に対し鴨緑江を渡るよう毛沢東は下命した[19]。一九日，彭徳懐を総司令官とする二〇万もの志願軍は鴨緑江を渡った。

しかしこの間，中国人民志願軍の朝鮮出兵に伴い，中朝合同軍の指揮権の問題が浮上した。周恩来がスターリンと会談を行った頃，志願軍の出兵に関連する諸問題が俎上に載っていたが，肝心の指揮権を始めとする微妙な問題は落着していなかった。このため一〇月八日に瀋陽で彭徳懐と高崗は金日成指導部の特使の朴一禹（パク・イルウ）と会談を持った[20]。中朝

---

⑰　スターリンによる金日成宛電報について，Ciphered Telegram from Fyn Si (Stalin) to Kim Il Sung, 14 October 1950. (cited in *op. cit.,* "Stalin, Mao, Kim, and China's Decision to Enter the Korean War, September 16–October 15, 1950: New Evidence from the Russian Archives." p. 104.)

⑱　周恩来の報告について，Xu, "The Tortuous Process of Making the Final Decision to Enter the Korean War," pp. 11–12. (cited in *op. cit., The Sino-Soviet Alliance and China's Entry into the Korean War*. p. 34.)

⑲　中国人民志願軍の朝鮮出兵への最終的下命と鴨緑江の渡河について，Mao Zedong to Deng Hua, Hong Xuezhi, Han Xianchu, and Xie Fang, October 18, 1950, Mao Zedong wengao, I, p. 568. (cited in *The Sino-Soviet Alliance and China's Entry into the Korean War,* p. 34.); and *op. cit., United States Army in the Korean War: Policy and Direction: The First Year,* Chapter XIII: The Chinese Take a Hand, pp. 233–234.

合同軍の指揮権は当然，朝鮮出兵を要請した自分にあると金日成は傲慢にも思っている様子であった。しかし，人民軍が数十万名もの中国志願軍を指揮することなどできない現実を突きつけられると，金日成は合同指揮を提唱することで指揮面での影響力をなんとか保持しようとした。これに対し，彭徳懐は猛然と反駁した。滅亡の危機を招いた金日成のそれまでの軍事采配を侮蔑していた彭徳懐からみて，金日成に懇願される形で志願軍が朝鮮出兵を行った行き掛かりからして，また中朝国境を目指し殺到を目論む敵軍の前面に志願軍が立つこと，さらにわずかな人民軍の残存兵力との調整のために合同指揮の指揮権を握るのは志願軍司令官以外に考えられなかった。加えて決定的であったのは一〇月一日の毛沢東宛の電報でスターリンは中国軍による指揮権を進言していた[21]。このため，金日成はしぶしぶ引き下がらざるをえなかったのである。

追い詰められた金日成にとって中国による朝鮮出兵は有難かった一方，スターリンと毛沢東のやり取りは真に心外であった。一時的ではあったが避難命令を下したスターリンに金日成の忠誠心は激しく揺れ動いた。しかも金日成からみて中国人民志願軍の出兵は思わぬ副産物を産む可能性があった。今後，作戦の指揮権が事実上，自分の手を離れ彭徳懐の手に委ねられることは必至である。これにより，戦争の行方も北朝鮮の命運も毛沢東や彭徳懐に握られかねないからであった。

---

⑳ 一〇月八日の会談について，Telegram from Kim Il Sung to Mao Zedong, October 8, 1950.; and Telegram from Peng Dehuai to Mao Zedong, October 10, 1950, (cited in *op. cit.,* "Sino-North Korean Conflict and its Resolution during the Korean War," p. 13.)

㉑ 毛沢東宛のスターリン電報について，Telegram from Filippov (Stalin) to Roshchin, 1 October 1950, Transmitting Message to Mao Zedong and Zhou Enlai. For the full text see A. Mansourov, "Stalin, Mao, Kim and China's Decision to Enter the Korean War," *CWIHP Bulletin* 6/7 (Winter 1995/1996), pp. 116–117. (cited in *op. cit.,* "Sino-North Korean Conflict and its Resolution during the Korean War," p. 13.)

4．スターリンによる支援の実態

ところで，中国人民志願軍による朝鮮出兵を巡り，スターリンと毛沢東の間で何が約束されたについては，多くの疑問が残る。スターリンの懸念は核戦力で圧倒的な優位に立つ超大国・米国との直接対決の回避一点にあった。その危険性をスターリンは正確に把握していた。ソ連軍の介入の事実が暴露されることをスターリンが殊の外，恐れた。ソ連軍機パイロットが万が一，拘束されれば，これによってソ連軍介入の事実が白日の下にさらされ，そのために米ソ間の軍事衝突に発展しかねないからであった。

一九五〇年八月に中朝国境付近の安東空軍基地に最新鋭機のミグ15（MiG-15s）戦闘機を配属したものの，その狙いはあくまで満州地域の都市と工業地帯や中朝国境地域の水力発電所への米軍機による空爆を阻止すること，北朝鮮領内への様々な物資を円滑に輸送できるよう補給路の防御を強化すること，中国人民志願軍が鴨緑江を渡河するのを確実にするため，鴨緑江に架かる橋の防護に当たることなどであった。加えて，ソ連空軍は中国人パイロットや地上クルーの訓練にも当たった。これらの目的のために動員された要員は総勢七万人にも及んだ[22]。

他方，鴨緑江上空を突破し，誤って北朝鮮領空に進入することはないようにスターリンがソ連空軍に対し厳命した。それでも九月下旬にスターリンが平壌の防護のために二個ソ連戦闘機連隊の派遣を真剣に検討する機会があった。ところが，ワシレフスキー・ソ連国防相は激しく反発した。派遣予定の旧式のプロペラ機では最新鋭の米軍機にとても太刀打ちできないばかりか，軍事介入の証拠が握られてしまい，そのためにソ連本土への米軍による大規模空爆を呼び込みかねないと，ワシレフスキーは断じた[23]。

---

[22] ソ連の支援内容について，Mark Andrew O'Neill, "The Other Side of the Yalu: Soviet Pilots in the Korean War, Phase One, November 1, 1950–October 23, 1951," Ph.D. Dissertation, The Florida State University, 1996.; and Mark O'Neill, "Soviet Involvement in the Korean War: A New View from the Soviet-era Archives," *OAH Magazine of History*, Volume 14, No 3, Spring 2000.

[23] ワシレフスキーの進言について，*op. cit.,* "Soviet Involvement in the Korean

ワシレフスキーの進言を受け入れる形で，スターリンはソ連軍機の朝鮮派遣命令を思いとどまった。これに対し，これでは中国志願軍の安全が確保できないとして憤りを露にすると共に，スターリンが空中支援を約束したではないかと毛沢東は執拗に食い下がった。他方，米国との正面衝突だけは回避したいスターリンはそれ以上の支援には応じようとはしなかった。このため，毛沢東とスターリン両者の間はギクシャクしたため，周恩来が急遽，スターリンとの直談判のためにはせ参じたとおりである。しかしそれでも，スターリンは空中支援の提供を拒絶した。結局，平壌の陥落とそれに続く中朝国境の鴨緑江への米軍の進撃が差し迫った中で，毛沢東は朝鮮出兵をついに決断した。一〇月一九日に結局，ソ連軍機による空中支援なしで参戦することになった。

いずれにせよ，毛沢東とスターリンの取引には最初から明白な矛盾が見え隠れしていた。米軍との直接対決を回避させるべくソ連軍の介入をなんとしても控えたいスターリンと，ソ連軍機による空中支援を是が非でも預かりたい毛沢東の取引とはそもそもかみ合わない取引であった。毛沢東にとってみれば，一九五〇年二月に締結された中ソ友好同盟相互援助条約の精神を露骨に欺いたスターリンによる裏切りであったが，そうした約束を行った覚えはスターリンにはなかった。

それでもソ連は最前線から一〇〇キロ・メートルほど離れた北朝鮮領空域内での空中支援の提供を行った[24]。中国空軍機を偽装したミグ15が出現した「ミグ回廊」と揶揄された空域で，ミグ15は旧式のロッキード P-80などをしばしば窮地に陥れた。これに頭を痛めた米空軍は後に最新鋭のF-86を導入することでミグ15に対抗した。それでも，米軍機との交戦をできるだけ回避しようとするスターリンの基本路線には変更はなかった。米

War: A New View from the Soviet-era Archives."

[24] この点について，Roy Appleman, *South to the Naktong, North to the Yalu.* United States Army in the Korean War, Chapter XXXV: Eighth Army Holds the Ch'ongch'on Bridgehead, (Washington D.C., 1961.) pp. 715–716.

軍の実効支配地域の上空への進入や海上上空への進入はご法度とされた。これにより，米軍機を追いかける能力も著しく制限されることになった。この結果，北朝鮮の国土の大半が米軍機による爆撃にさらされ続けた。朝鮮戦争の末期には北朝鮮領内に空軍基地の建設も企てたが，米軍機による爆撃にさらされ，失敗に帰した。

5．中国人民志願軍の第一次戦役

ソ連空軍機による空中支援が確保されなければ，中国人民志願軍は米空軍機による爆撃や機銃掃射の格好の餌食となる可能性が大であった。スターリンから痛烈に裏切られたと感じたものの，それでも出兵への毛沢東の意思が揺らぐことはなかった。火力や装備の面で劣勢に立たされたとしても，兵員数上での圧倒的優位，兵士達の士気の高さ，人民からの支持といった優勢を踏まえれば，不利な状況は逆に優位へと転ずることができると，毛沢東は確信していた[25]。

一〇月二三日に米統合参謀本部により指示された北進限界線をマッカーサーは撤廃し，感謝祭攻勢（the Thanksgiving Day Offensive）として知られるとおり，米第八軍と米第一〇軍の両軍に対し全速力で鴨緑江へ向け邁進するよう檄を飛ばした[26]。

これに対し，一〇月一九日に鴨緑江を渡った二〇万もの中国人民志願軍は二五日に第一次戦役に打って出た[27]。韓国軍第二軍（the ROK II

---

[25] 中国共産党拡大政治局会議での毛沢東の意思の表明について，*op. cit., The Sino-Soviet Alliance and China's Entry into the Korean War,* p. 30.

[26] 感謝祭攻勢について，Allan R. Millett, *The Korean War: Volume 2*, Chapter 2: Chinese Communist Forces Cross the Yalu, Korea Institute of Military History, (Lincoln, Nebr. : University of Nebraska Press, 2001.) p. 113.

[27] 中国人民志願軍による第一次戦役について，*op. cit., United States Army in the Korean War: Policy and Direction: The First Year,* Chapter XIII: The Chinese Take a Hand, p. 233.; and *op. cit., The Korean War: Volume 2*, Chapter 2: Chinese Communist Forces Cross the Yalu, pp. 126-130.; and Phases of CCF Korean War Campaign, China's View of Their Korean War

Corps）が温井（オンジュン）付近を進軍していたところに，待ち伏せていた中国人民志願軍第四〇軍一一八師団の大部隊が襲い掛かった。これが中国軍と韓国軍ならびに米・国連軍との最初の戦いとなったが温井の戦い（the Battle of Onjong）であった。続いて一一月一日に雲山（ウンサン）で米第八軍騎兵連隊が志願軍第三九軍による急襲を受けた。これが雲山の戦い（the Battle of Unsan）である。

ところが，志願軍第三九軍がまもなく山中に退却を図ったため，国連軍司令部だけでなく統合参謀本部もその動員力の限界の故ではないかと感じざるをえなかった[28]。しかし，退却は動員力に限界があるかのように偽装した撹乱戦術であった。拍子抜けしたマッカーサーは落とし穴が待ち受けていることを知らず各軍にさらなる北進を指示した。この間，志願軍は米・国連軍による上空からの偵察に探知されることがないよう白昼，道路を進軍することを避け，夜間，夜闇に隠れ険しい山間地を巧みに移動し，中朝国境へと米・国連軍と韓国軍がおし寄せるのを待った。韓国軍も米・国連軍も山中に潜んだ志願軍の大部隊が突如，襲い掛かってくるという術策には気づくことはなかった。

6．第二次戦役

一二月二五日のクリスマスまでに北朝鮮制圧の達成を確信したマッカーサーは一一月二四日に国連軍指揮の下の全軍にクリスマス帰国攻勢（the Home-by-Christmas Offensive）を下命した[29]。これを受け，朝鮮半島西方から北進する米第八軍と半島東方の元山港から上陸した米第一〇軍に対し中朝国境に向けて全速力で突進しだした。ところが，米第八軍と米第一〇

Participation.

[28] 中国人民志願軍の一時的撤退の理由を巡る推測と分析について，*op. cit., United States Army in the Korean War: Policy and Direction: The First Year,* Chapter XIV: The Threshold of Victory, pp. 257–273.

[29] クリスマス帰国攻勢について，*op. cit., The Korean War: Volume 2,* Chapter 3: Withdrawal to the 38th Parallel, p. 220.

軍の到来を山中で膨大な数の志願軍が待ち伏せていたのである。

一一月二五日の夜，清川江（チョンチョンガン）渓谷づたいに進軍していた米第八軍と韓国軍に一〇万以上の中国人民志願軍第一三集団軍がチャルメラや銅鑼（どら）を鳴らして襲い掛かった[30]。この清川江の戦い（the Battle of the Ch'ongch'on River）を皮切りに，志願軍による第二次戦役の幕が切って降ろされた。異様な恐怖感に包まれた兵士達に追い打ちをかけたのは百年に一度といわれた寒波の到来であった。氷点下の極寒の下で兵士達は絶望的な戦闘を強いられた。米第八軍はかろうじて志願軍の包囲網を脱し，一二月二日に撤退にこぎつけた。

この間，もう一つの壮絶な戦闘が長津（チャンジン）貯水池付近で始まった。一一月二七日の日没後，長津貯水池付近を行軍していた米第一〇軍所属の第一海兵師団（the US 1st Marine Division）と第七海兵師団を待ち伏せしていた一二万もの中国人民志願軍第九軍が奇襲攻撃を浴びせた[31]。この長津貯水池の戦い（the Battle of Chosin Reservoir）をもって戦局はほぼ完全に一転した。それまでのマッカーサーによる楽観的な展望は根元から砕け散ることになる。

⑶⓪　一一月二五日の志願軍による第二次戦役について，*op. cit., United States Army in the Korean War: Policy and Direction: The First Year,* Chapter XV: Facing New Dilemmas, p. 274.; and Second Phase Campaign: November 25, - December 24, 1950. Phases of CCF Korean War Campaign, China's View of Their Korean War Participation.

⑶①　この点について，Richards Peters, Xiaobing Li, *Voices from the Korean War: Personal Stories of American, Korean, and Chinese Soldiers,* Chapter 12: The Chosin Reservior, (Lexington, Ky. : University Press of Kentucky, 2005.) pp. 97-101.; Roy E. Appleman, *East of Chosin: Entrapment and Breakout in Korea, 1950*, Chapter 11: MacArthur Calls Conference, November 28, (Texas a & M University Military History Series: 1990.) p. 169.; and Second Phase Campaign: November 25 - December 24, 1950. Phases of CCF Korean War Campaign, China's View of Their Korean War Participation.

7．マッカーサー声明と撤退指示

二八日に東京の国連軍司令部でマッカーサーは事態の急転を伝える声明を統合参謀本部に伝えた。その意味するところは朝鮮半島からの全面的な撤退を視野に入れなければならないとするものであった[32]。マッカーサーはその後まもなくコミュニケ第一四号を発信した。現在，二〇万もの中国正規軍と対峙している。「…我々は全く新しい戦争に直面するに至った。…現在の我々の戦力では中国軍が有利に立つ宣戦布告もない戦争に対抗するには十分でないことは自明である。…」[33]

声明の直後，マッカーサーは直ちに戦地から盟友のウォーカーと腹心のアーモンドを東京のマッカーサー邸に呼び出し，緊急会合の開催を決めた。二八日の夜から二九日の深夜にかけ開催された緊急会合にはマッカーサー，ウォーカー，アーモンドの他，ヒッケィ（Thomas Francis Hickey），ライト（Edwin K. Wright），ウィロビー（Charles A. Willoughby），ホイットニー（Courtney Whitney）司令官達が加わった。マッカーサーはウォーカーに米第八軍はなんとしても平壌を堅持すること，アーモンドに米第一〇軍を速やかに撤退させることを指示した[34]。この後直ちにアーモンドは現地へと戻り，撤退を指示した。

仁川（インチョン）上陸作戦の成功以来，マッカーサーから戦局の圧倒

⑶2　マッカーサー声明について，*op. cit., East of Chosin: Entrapment and Breakout in Korea, 1950,* Chapter 11: MacArthur Calls Conference, November 28, p. 168.

⑶3　コミュニケ第一四号について，*op. cit., East of Chosin: Entrapment and Breakout in Korea,* Chapter 11: MacArthur Calls Conference, November 28, p. 169.; and Jeffrey W Taliaferro, *Balancing Risks : Great Power Intervention in the Periphery,* Chapter 5: The United States and the Korean War (1950-51), (Ithaca, N.Y. : Cornell University Press, 2004.), pp. 162-163.

⑶4　東京での緊急会合について，*op. cit., United States Army in the Korean War: Policy and Direction: The First Year,* Chapter XV: Facing New Dilemmas, pp. 278-282.; and *op. cit., East of Chosin: Entrapment and Breakout in Korea,* Chapter 11: MacArthur Calls Conference, November 28, p. 169.

的優位をことあるたびに吹き込まれ，楽観主義に散々慣らされてきたトルーマンと政権幹部，統合参謀本部，国防総省の面々は始めて戦局が厳しい状況に立たされていることを当のマッカーサーから告げられた。しかも，わずか数日間で天と地が引っくり返ったような事態の急変に愕然としないものはいなかった。

この間，米・国連軍と韓国軍の撤退に獅子奮迅の活躍を行ったのは海兵隊機コルセアによる空中支援であった。コルセアは猛攻を続ける志願軍に対し激しい機銃掃射を行い，撤退する友軍の防護に務めた。コルセアの出撃回数は一一月二八日に二九回，二九日には六一回にも及んだ[35]。猛烈な寒さと物資不足に悩まされた友軍に海兵隊輸送機が弾薬や医薬品を空中から投下し，また海兵隊大型ヘリコプターは負傷者の運搬に当たった。

米第一〇軍の第一海兵師団と第七海兵師団は一二月一日，中国人民志願軍第九軍の包囲網から潜り抜けながら北朝鮮の北東部沿岸への撤退を開始した。氷点下をはかるに下回る寒さのなかで，まる五日間に及び繰り広げられた激闘は双方に甚大な犠牲者をもたらした。長津湖付近の戦闘だけで米海兵隊の犠牲者は四四〇〇名にも上った[36]。とはいえ，コルセアによる空中支援がなかったならば，さらなる犠牲者数の激増は免れなかった。これに対し，中国志願軍の犠牲者は二万人にも及んだ。米海兵隊を撤退に追い込んだ志願軍が祝杯を挙げたが，数倍にも達する犠牲者を出したうえでのことであった。周囲に群がる志願軍兵士による執拗な追撃をなんとか振り切る格好で退却した米海兵隊は一二月三日までに米第一〇軍本隊に合流した。

⑶5　コルセア機による空中支援について，Kenneth W. Condit and Ernest H. Giusti, “Marine Air at the Chosin Reservoir.” Marine Corps Gazette, v. 36, no. 7 (July 1952.), p. 23. (cited in “Marine Air over Korea: Pusan to the Chosin Breakout.”)

⑶6　長津湖付近の戦いによる米海兵隊と中国人民志願軍の人的損害について，Carter Malkasian, *The Korean War,* The Fighting: Avoiding a Third World War, (New York : Rosen Pub, 2009.) p. 34.

しかしクリスマスまでの北朝鮮制圧を謳ったクリスマス帰国攻勢は夢と消え，反対に北朝鮮領内からの全面的な撤退を余儀なくした。これを契機として，北緯三八度線以南に押しやられた米・国連軍は五一年三月に三八度線を回復すると共に北朝鮮領内への北進を再開するが，五三年七月の休戦協定の調印まで二度と平壌を攻略することはなかった。

⑵ 米国内の原爆投下論争

１．トルーマンの記者会見とその余波

中国人民志願軍による第二次戦役を受け，全軍が退却を余儀なくすると，絶望的事態を打開する秘策として原爆使用が一気に俎上に載ることになった。この引き金となったのが，一一月二九日に米海兵隊が長津貯水池付近で中国志願軍に包囲され窮地に立たされるといった事態であった。これは一〇月一五日にウェーク島で示されたマッカーサーの楽観的な予想を完全に覆すものであった。これに対し，急遽対応を迫られたトルーマンは翌日三〇日に米国内だけでなく全世界を驚愕の渦に巻き込む記者会見を行うことになる[37]。

席上，米・国連軍は朝鮮半島での任務を放棄する意図はないとトルーマンは断言した。記者から質問が向けられると，軍事上，必要とあれば，あらゆる措置を米国は講じる用意があることをトルーマンは明らかにした。これに原爆が含まれるのかとの記者の質問に，すべての兵器が含まれると，原爆の使用を示唆した。続いて，原爆の使用について活発な論議があったという意味かとの質問に対し，トルーマンは朝鮮半島での原爆投下の可能性について，政権内部で活発な論議があったことを明らかにした。原爆がとてつもない破壊力を持った兵器であり，侵攻事件とは無関係の無辜の

---

[37] トルーマンの記者会見について，Robert H Ferrell, *Harry S. Truman : a Life,* Chapter 15: The Korean War, (Norwalk, CT : Easton Press, 1997.) p. 328.; and Roger Dingman, “Atomic Diplomacy during the Korean War,” *Nuclear Diplomacy and Crisis Management*, (MIT Press, 1990.) pp. 129–130.

人々を殺戮するゆえに，その使用を躊躇せざるをえない。しかし，原爆投下は状況に応じて必要となる。しかも国連からの承認の有無如何にかかわらず，米政府独自の判断で可能である。原爆の使用の可否はマッカーサー司令官の判断に委ねられると，トルーマンは言い放ったのである。

一一月三〇日にトルーマンが政権内で原爆投下を巡り活発な議論があったと述べたとき，議論の発信源はまちがいなくマッカーサーとその周辺であった。そのマッカーサーが原爆投下を必要と感じたのは中国人民志願軍の出兵のはるか以前に遡る。韓国侵攻から二週間後の七月九日の段階で，マッカーサーは統合参謀本部に対し原爆使用の可否について検討を打診していた[38]。これに対し，ボルテ（Charles Bolte）統合参謀本部作戦部長は一〇発から二〇発程度の原爆ならば，準備可能であると回答した[39]。しかし別段，原爆投下に頼らなくとも通常戦力で朝鮮人民軍の撃退は十分に対応可能であると米統合参謀本部が考えたことで，マッカーサーの申し出はにべもなく拒否されたという経緯があった。ところが，トルーマンの記者会見は原爆投下への動きに拍車を掛けた。同日，トルーマンは米空軍に対し原爆を含む攻撃力の増強を指示すると，これに対し，ストレイトマイヤー（George Stratemeyer）極東空軍司令官はヴァンデンバーグ（Hoyt Vandenberg）空軍参謀総長に対し極東地域への原爆の移送準備に入るよう打診した[40]。こうした流れに待ったをかけたのは原爆投下を危惧する西

---

(38)　原爆投下を示唆するマッカーサーの発言について，Bruce Cumings, Chapter 4: American Airpower and Nuclear Strategy, in Mark Selden, and Alvin Y. So, eds., *War and State Terrorism: the United States, Japan, and the Asia-Pacific in the Long Twentieth Century,* (Lanham, Md. : Rowman & Littlefield Publishers, 2004.) p. 70.

(39)　ボルテの回答について，*op. cit., War and State Terrorism: the United States, Japan, and the Asia-Pacific in the Long Twentieth Century,* Chapter 4: American Airpower and Nuclear Strategy, p. 70.

(40)　またこのとき，一九四五年三月九日夜半の東京空襲で悪名高いルメイ（Curtis LeMay）司令官は原爆投下に向け運搬手段や技術訓練について豊富な経験と詳細な知識が自分にはあると，ストレイトマイヤーに豪語している。“Why Did Truman Really Fire MacArthur?　… The Obscure History of

欧の同盟諸国の動きであった。

トルーマンの記者会見が中朝両指導部にどのような影響を与えたかはあくまでも不明であった反面，西欧の同盟諸国の首脳達を震撼させるには十分であった。原爆投下の可能性を危惧したのはイギリスの首脳達だけではなくフランスの首脳達も同様であった。トルーマンの発言に驚愕したアトリー（Clement Richard Attlee）英首相はものの数時間もしない内にトルーマンに緊急会談の開催を申し込んだ。アトリーは同様にフランス首脳達との会談を決めた。こうして，アトリー，ベヴィン（Ernest Bevin）英外相，プレヴァン（René Pleven）仏首相，シューマン（Robert Schuman）仏外相は一二月二日にロンドンで急遽，会談を行った(41)。

両国首脳の共通理解は原爆の投下が引き金となり欧州前面へと戦闘が飛び火する可能性であった。冷戦勃発以来，欧州前面で相対峙するソ連軍とNATO 軍の間の軍事バランスは NATO 側に明らかに劣勢であり，そこに持ってきて朝鮮半島で原爆が使用されるようなことがあれば，これへの報復としてソ連軍が一気に西欧諸国へ雪崩れ込むのではないか，しかもスターリンは開発したばかりの原爆の使用に踏み切るのではないかと，首脳達は怯えた。原爆の使用はなんとしても控える必要があること，中国との武力衝突を回避するため，米・国連軍は中朝国境から撤退し，米国は中国と直ちに交渉を行う必要があるとの結論に英仏の首脳達は至った。

その直後，渡米したアトリーは一二月四日から八日までトルーマンとの首脳会談を続けた。朝鮮半島での原爆の使用に危惧の念を表明すると共に，中国との休戦を促した。アトリーの必死さが伝わったかのように，トルーマンはそうした可能性は低いとアトリーを安心させたのである(42)。

Nuclear Weapons and the Korean War Provides the Answer."

(41) 英仏首脳会談について，William Stueck, Chapter 4: Limiting the War, *The Korean War: An International History,* Chapter 4: Limiting the War, (Princeton, N.J. : Princeton University Press, 1995.) pp. 131-132.; and Lanxin Xiang, *Recasting the Imperial Far East : Britain and America in China, 1945-1950,* Chapter 7: the Korean War, (Armonk, N.Y. : M.E. Sharpe, 1994.) pp. 232-233.

2．米・国連軍の全面的撤退と原爆投下へのマッカーサーの執念

この間，中国人民志願軍の大軍が平壌に押し寄せる中，一二月三日にマッカーサーは平壌の放棄を決断した。四日に米第八軍は南方への撤退を開始した一方，米第一〇軍は北東海岸の興南港と元山港から艦艇で撤退を開始した[43]。

こうした事態の下で，マッカーサーは統合参謀本部に対し緊急増派の要請を願い出た。マッカーサー曰く，中国人民志願軍による第二次戦役により米兵力は三割近くも喪失したため，緊急に七四〇〇〇人の増員を確保して頂きたい。さもなくば，米・国連軍は朝鮮半島からの全面的な撤収を余儀なくされる。これに対し，統合参謀本部は一二月中に三三〇〇〇人の増員の用意があると返答したが，その目処も立たなくなり，二三〇〇〇人の増員しか認められないとその後，下方修正を行った。そこでマッカーサーが目をつけたのは中国国民党軍の朝鮮出兵であった。六月二五日の侵攻事件直後に蒋介石が申し出た三三〇〇〇人の中国国民党軍の派遣を持ち出し，統合参謀本部にその派遣を認めていただけないかと，マッカーサーは願い出た。マッカーサーによれば，すでに志願軍が朝鮮出兵を企てた今，国民党軍の提供をあえて拒む必然性はなくなった。しかも中国が朝鮮戦争にのめり込んでいる今，中国による台湾侵攻といった事態は現実的でなくなったゆえに，国民党軍の出兵により台湾の防衛基盤が揺らぐことにはならない。国民党の出兵にはなんの問題もないはずだと，国民党軍の派遣提供を承認するよう統合参謀本部に強く迫った[44]。

---

(42)　米英首脳会談について，*op. cit., The Korean War: An International History,* Chapter 4: Limiting the War, pp. 132–136.; and *op. cit., Recasting the Imperial Far East: Britain and America in China, 1945–1950,* Chapter 7: the Korean War, pp. 233–236.

(43)　米第一〇軍の撤収について，*op. cit., United States Army in the Korean War: Policy and Direction: The First Year,* Chapter XVI: The Brink of Disaster, pp. 300–304.

(44)　一一月二八日のマッカーサーの要求について，Rad, C 50021, CINCFE to JCS, November 28, 1950. (cited in *op. cit., United States Army in the Korean*

しかし今となれば，統合参謀本部にマッカーサーの見解に共鳴するものは少なかった。国民党軍の出兵は中国共産党軍とのより以上の激しい衝突をもたらし，全面戦争の危機を孕むこと，また三三〇〇〇人程度の出兵が戦局を大きく変えるとみることは難しいこと，さらには国連軍への派兵を行っている同盟諸国の動揺を誘い，同盟諸国から米国が離反されかねないと統合参謀本部は警告したのである[45]。第二次戦役を受け，全面的な撤退を余儀なくされた今，統合参謀本部の司令官達にはマッカーサーの要求を鵜呑みにするものはいなかった。

こうした中で，マッカーサーは原爆投下にますます活路を見出すようになった。マッカーサーにとって原爆は敵軍の動きを止めるための単なる恫喝のための手段ではなく，戦争を終結させるための究極的な手段であった。ところが，アトリーによる懸命な説得を受けたトルーマンが原爆の使用はないと米英首脳会談後の一二月八日の記者会見で断言した。これに対し，政権最高指導者から許諾をいただけないのであれば，司令官の裁量で原爆投下の許諾をいただけないものかと，マッカーサーは九日に国防総省に打診したが，国防総省は応じなかった[46]。

焦燥感を強めるマッカーサーに追い打ちをかけたのが米第八軍司令官ウォーカー中将の訃報であった。二三日の朝，ウォーカーは釜山からジープで移動中に対向車線を走る韓国軍トラックと衝突事故を起こし，ジープから放り出され，くぼ地に激しく叩き付けられ死亡した[47]。盟友の死を受け，

War: Policy and Direction: The First Year, Chapter XVI: The Brink of Disaster, p. 295.)

[45] 一一月二九日の統合参謀本部の警告について，Rad, JCS 97594, JCS to CINCFE, November 29, 1950. (cited in *op. cit., United States Army in the Korean War: Policy and Direction: The First Year,* Chapter XVI: The Brink of Disaster, p. 296.)

[46] 一二月九日のマッカーサーによる原爆投下の許諾請求について，*op. cit., War and State Terrorism: the United States, Japan, and the Asia-Pacific in the Long Twentieth Century,* Chapter 4: American Airpower and Nuclear Strategy," p. 71.

酷く消沈したマッカーサーは翌日，三四発にも上る「原爆投下目標リスト」を国防総省に突きつけた[48]。

3．リッジウェイの登場

この間，マッカーサーが米第八軍の司令官に選任したのは陸軍副参謀長のリッジウェイ（Matthew Ridgway）中将であった[49]。ウォーカーの身に万が一のことがあった場合，リッジウェイを後任に委ねたいとの考えをマッカーサーはコリンズ（Joseph Lawton Collins）陸軍参謀総長に前から伝えていた。リッジウェイが第二次大戦で第八二空挺師団長や第一八空挺軍団長として輝かしい戦功を挙げただけでなく，陸軍省で誰よりも朝鮮半島情勢に精通していたことをマッカーサーは熟知していた。このことはリッジウェイが東京のマッカーサーを訪ねた一二月二五日に，マッカーサー

⑷⑺　ウォーカーの死について，*op. cit., United States Army in the Korean War: Policy and Direction: The First Year,* Chapter XVI: The Brink of Disaster, p. 305.; and Billy C. Mossman, *United States Army in the Korean War: Ebb and Flow,* November 1950–July 1951, Chapter IX: The Chinese Third Offensive The Opening, (Defense Dept., Army, Center of Military History, 1990.) p. 177.

⑷⑻　マッカーサーの「原爆投下目標リスト」について，*op. cit., War and State Terrorism: the United States, Japan, and the Asia-Pacific in the Long Twentieth Century,* Chapter 4, American Airpower and Nuclear Strategy," p. 71. これと関連して，一〇日間で朝鮮戦争を終結させることができるとする秘策がマッカーサーにあったと言われる。伝えられるところによれば，満州に約三〇発の原爆を投下し，その上で，日本海上空から朝鮮半島上空を横切り黄海上空に達する空域に放射性コバルト（a belt of radioactive cobalt) を大量に散布するとする作戦であった。マッカーサーによれば，六〇から一二〇年間にわたり強い放射能が残存することで，少なくとも向こう六〇年間，中国軍による朝鮮半島への侵攻は阻止できることになる。*op. cit., War and State Terrorism: the United States, Japan, and the Asia-Pacific in the Long Twentieth Century,* Chapter 4, American Airpower and Nuclear Strategy, pp. 71–72.

⑷⑼　マッカーサーによるリッジェイの選任について，*op. cit., United States Army in the Korean War: Policy and Direction: The First Year,* Chapter XVI: The Brink of Disaster, pp. 306–308.; and *op. cit., United States Army in the Korean War: Ebb and Flow* , November 1950–July 1951, Chapter IX: The Chinese Third Offensive The Opening, pp. 177–178.

が米第八軍の指揮を任せると全幅の信頼を置いていることをリッジウェイに伝えたことに記される。リッジウェイはマッカーサーにとって最良の選択であった。実際，リッジウェイの登場は中国人民志願軍の優勢へと傾きかけた流れを大きく変更させる原動力の一つとなる。

とはいえ，戦地へ赴いたリッジウェイがまず目にしたのは第二次戦役以降，敗走に次ぐ敗走で意気消沈し戦意を失った兵士達の姿であった[50]。兵士達の目に輝きはなく，歩き方にしても自信を失っており，戦闘集団とはほど遠い状態にあった。若い兵士達を奮い立たせるだけではなく指揮面の抜本的な建て直しが不可欠であると感じたリッジウェイは幾つかの策に打って出た。士気を高めるためには兵士達だけでなく司令官達にも適度な休養が必要であると考えた。このため半年続きで勤務中であった司令官は新たな司令官と交代させた。作戦行動も極めて非効率であるとリッジウェイの目に映った。リッジウェイはできる限り多くの作戦計画の討議に加わり，自らの目で作戦計画の把握に努めた。また司令官の多くが前線から遠く離れた指揮所から指示を下していたことも作戦行動の非効率を生んでいた。このため前線に近い指揮所から指示を送るように司令官達に指令を下した。また敵側の動きを的確に捉えることも不十分であった。これを是正するため情報機関に対し提供情報の正確さを要求すると共に，敵の動きを正確に捉えるべく十分な巡視を行うよう司令官にリッジウェイは求めた。加えて，圧倒的に優勢に立つ空軍力が十分に活用されていないとの反省に立ち，徹底的な空爆の活用を命じると共に，空爆作戦と地上作戦の合同作戦の実施を重視した。リッジウェイの講じた改善策はまもなく成果として現れた。

⑸　リッジウェイによる米第八軍の建て直しについて，*op. cit., United States Army in the Korean War: Ebb and Flow,* November 1950–July 1951, Chapter IX: The Chinese Third Offensive The Opening, pp. 180–183.; and *op. cit., The Korean War: America's Forgotten War,* pp. 56–58.

4．第三次戦役と彭徳懐と金日成の対立

リッジウェイが米・国連軍の建て直しに奮闘していた一二月下旬，五〇万もの中朝合同軍はソウル攻略を目指し第三次戦役に打って出る直前にあった。一九五〇年一二月三一日，第三次戦役に打って出た志願軍の大軍は北緯三八度線を突破し，韓国領内に再び雪崩れ込んだ。リッジウェイは中朝合同軍による包囲を回避すべく，米・国連軍と韓国軍にソウルからの撤退を指示した。これにより一月四日にソウルはまたしても陥落し，勢いづいた中朝合同軍は一月一五日までに三七度線まで達した。

ところがこの時，中朝合同軍の指導部内では激しい対立が頭を擡げていた。それは韓国制圧に向け再び一気に南進を図るか，それともしばしの間，来るべき攻勢に向け戦力の建て直しを図るべきかどうかの選択であった。韓国制圧への好機到来とみた金日成にとって一気の南進以外に他に方策はなかった。これに対し，時期尚早として中朝合同軍の戦力建て直しが優先事項であると考えた彭徳懐は激しく反駁した。志願軍兵士達は二ヵ月以上にもわたる激しい戦闘の連続で少なからず消耗をきたしたことに加え，物資・食料の補給は日に日に深刻になり始めていた。志願軍は食糧，弾薬，物資などを夜間に中朝国境から前線に移送させていたが，前線が南下するに伴い，補給線の間延びは避けられず，すでに補給は限界に近い状態にあった。この結果，金日成と彭徳懐が真っ向から対立し，それを受け，毛沢東とスターリンが決断を迫られる格好となった。

中朝合同軍がソウルに雪崩れ込んだときには，ソウルの放棄を決めた米・国連軍は西方の水原（スウォン），中央の原州（ウォンジュ），東方の三陟（サムチョク）北方に向けて撤退を図っていた。このとき，米・国連軍の退却振りになにか不気味なものを彭徳懐は感じとった。米・国連軍が意識的に退却戦略を講じているとすれば，これを猛追することは敵のわなに嵌る危険性がある。退却を続ける米・国連軍を深追いすぎると，それに伴い補給線の間延びを招き，その背後を衝かれかねない。彭徳懐の頭を離れなかったのは，仁川上陸作戦の二の舞を被る危険性であった。そこで，

彭徳懐は金日成に打電した[51]。米・国連軍がソウルを放棄した今，ソウルの攻略には決定的な重要性はない。米・国連軍の撤退が続くのであれば，中朝合同軍は水原まで南進した後，そこで指令を待たなければならない。

彭徳懐は毛沢東にも打電した[52]。彭徳懐曰く，撤退を図る米・国連軍を闇雲に猛追するのではなく漸進することが正しいのであり，北緯三八度線を越え南進した後，主力部隊は三八度線から数キロ・メートルの地点まで退却し，戦力の建て直しにあたるべきである。毛沢東は彭徳懐の申し出へ全面支持の意思を表明した[53]。毛沢東が彭徳懐の申し出をスターリンに伝えると，最終判断を求められたスターリンは彭徳懐の鋭い洞察を賞賛すると共に戦力の建て直しへの支持を表明した[54]。これを受け，一月八日に中朝合同軍の南進は止まった。

これに対し，金日成は不満至極であった。二ヵ月間の再編成に同意したものの，韓国制圧に向け千載一遇の機会を逸したくない金日成は朝鮮人民軍だけでも南進を続けたいときかなかった。ここで，毛沢東は金日成へ一月一四日に打電した[55]。二，三ヵ月間，中朝合同軍は戦力の建て直しに当

---

(51) 彭徳懐による金日成宛の電報について，Peng Dehuai Junshi Wenxuan (Selected Military Works of Peng Dehuai) (Central Documents Publishing Co.,1988), p. 383; Telegram from Peng Dehuai to Kim Il Sung, January 3, 1951; and Peng Dehuai Nianpu, p. 464. (cited in *op. cit.,* "Sino-North Korean Conflict and its Resolution during the Korean War," p. 14.)

(52) 彭徳懐による毛沢東宛の電報について，Telegram from Peng Dehuai to Mao, December 19, 1950; Peng Dehuai Nianpu, p. 456. (cited in *op. cit.,* "Sino-North Korean Conflict and its Resolution during the Korean War," p. 14.)

(53) 毛沢東による彭徳懐提案の支持について，Mao Zedong Junshi Wenxian (Selected Military Works of Mao Zedong), Vol. 6, (Beijing: Military Science Publishing Co., 1993), pp. 245–246, pp. 249–250. (cited in *op. cit.,* "Sino-North Korean Conflict and its Resolution during the Korean War," p. 14.)

(54) 毛沢東のスターリン宛の電報について，Telegram from Mao Zedong to Filippov [Stalin], January 4, 1951. K. Weathersby, "New Russian Documents on the Korean War," *CWIHP Bulletin* 6/7, (Winter 1995/96), pp. 53–54. (cited in *op. cit.,* "Sino-North Korean Conflict and its Resolution during the Korean War," p. 14.)

たらなければならない。準備周到の備えがあって始めて戦闘を継続できるのであり，それができなければ，仁川上陸作戦での憂き目に再び会うことから，辛抱を重ね準備しなければならないと，毛沢東は金日成を諭した。

しかし金日成は朝鮮人民軍だけでも南進させるとの説を変えようとしなかった。このため一月一六から一八日にかけ，彭徳懐は金日成に翻意とするよう激しく迫った[56]。金日成がそれまでに冒した数々の作戦上の瑕疵と失態を厳しく追及し，それによって志願軍の出兵に至った諸々の経緯をとうとうと述べ，人民軍だけを南進させることはあまりに無謀でかつ危険であると彭徳懐は断じた。金日成はついに折れた。こうして二ヵ月間，戦力の建て直しにあたることを金日成は承諾した。

5．第四次戦役の頓挫

いかなる理由で中朝合同軍が一月下旬までに南進を止めたにせよ，南進の停止はリッジウェイをして反攻を命ずる好機となった[57]。一月二五日にリッジウェイの指令の下で米軍・国連軍がサンダーボルト作戦（Operation Thunderbolt）を発進させたのを皮切りに，二月五日にラウン

---

[55] このやり取りについて，Telegram from Mao to Filippov [Stalin], January 16, 1951, Transmitting Message from Mao to Peng Dehuai with Message for Kim Il Sung, Kathryn Weathersby, "New Russian Documents on the Korean War," *CWIHP Bulletin* 6/7, (Winter 1995/1996.) pp. 55–56. (cited in *op. cit.,* "Sino-North Korean Conflict and its Resolution during the Korean War," p. 16.)

[56] 彭徳懐と金日成の間の激論について，Telegram from Mao to Filippov [Stalin], January 27, 1951,Transmitting January 19, telegram from Peng Dehuai to Mao regarding Meetings with Kim Il Sung, K. Weathersby, "New Russian Documents on the Korean War," pp. 56–57. (cited in *op. cit.,* "Sino-North Korean Conflict and its Resolution during the Korean War," pp. 15–16.)

[57] リッジウェイ司令官指揮の下での米・国連軍の猛反攻について，*op. cit., United States Army in the Korean War: Policy and Direction: The First Year,* Chapter XVIII: The United Nations Strike Back, pp. 331–348.; and *op. cit., United States Army in the Korean War: Ebb and Flow, November 1950–July 1951,* pp. 228–350.

ドアップ作戦（Operation Roundup）に打って出た。これにより，漢江（ハンガン）南岸に達した米・国連軍は原州を奪還した。これに対し，負けじと中朝合同軍が二月一一日に第四次戦役を発進したものの，勢いは続かず，数日後，砥平里（チピョンリ）で戦役は頓挫し，多数の犠牲者を出すに至った。これを好機とみたリッジウェイは間髪いれずに二月二〇日にキラー作戦（Operation Killer）を発動し，数日後，漢江南岸を確保した。これに続き，リッジウェイは三月七日にリッパー作戦（Operation Ripper）に発令すると，いよいよ追い込まれた中朝合同軍はソウルの放棄を決め，退却した。これにより，三月一八日までにソウルを米・国連軍は再び奪還することができた[58]。

むすびにかえて――原爆投下への傾斜とマッカーサーの解任

リッジウェイ指揮の下で米・国連軍が再び勢いを取り戻した間，原爆の使用の可否を巡り激しい鬩ぎあいを演じてきたマッカーサーとトルーマンの対立はいよいよ沸点へと向かい出した[59]。戦局は米・国連軍の優勢へと再び転じたものの，決定的な勝利を収めるところまでは到底至らないとマッカーサーは感じた。マッカーサーにしてみれば，中途半端な妥協策など，受け入れがたかった。中国本土への原爆投下を含め決定的な対応にマッカーサーが執拗に拘ったのはこの故であった。そうしないかぎり，遅かれ早かれ米国へ災いがもたらされる。勝利に代わる選択肢など，マッカーサーにはなかった。これに対し，マッカーサーが執拗に求めた決定的対応に踏み切る意思も意図もトルーマンにはなかった。そうした対応はなによりも第三次世界大戦の呼び水となりかねない全面的な軍事衝突を招く危険性が高かった。二月の終わりまで米・国連軍が再び勢いを取り戻した今，あえ

---

[58] ソウルの奪還について，*op. cit., United States Army in the Korean War: Policy and Direction: The First Year,* Chapter XIX: The Crossroads, pp. 349–354.

[59] この点について，*op. cit., United States Army in the Korean War: Policy and Direction: The First Year,* Chapter XIX: The Crossroads, pp. 356–360.

て最悪の事態を誘発させかねない危険きわまりかねない冒険に踏み切る必要はなかったのである。

他方，陣頭指揮にあたるリッジウェイは撤退を続ける中国人民志願軍が遠からず猛烈な巻き返しに打って出る可能性を危惧した。そうした巻き返しの可能性を踏まえると，それ以上の北進に性急に打って出ることはリッジウェイとしても逡巡せざるをえなかった。そこに届いたのが入れ乱れるように米情報機関から発信された警戒を要する一連の情報であった[60]。一つは中朝国境地帯で中国人民志願軍の大規模の増派が行われており，まもなく大規模な攻勢に打って出る可能性があるとの情報であった。またソ連が二〇〇機もの爆撃機を満州地域の空軍基地に展開しており，日本への攻撃に向けて作戦準備に入ったとの情報も入った。加えて，八〇隻ものソ連海軍潜水艦がウラジオストク軍港に集結している。これらの情報がどれほどの信憑性を備えていたかは定かではなかったが，米政府内では動揺と混乱が広がった。こうした進捗は原爆投下に向け執念を燃やしていたマッカーサーに勢いを再び与えた。しかもマッカーサーだけではなかった。ここにきて，米統合参謀本部の面々も原爆投下に傾きだした。それまではマッカーサーが原爆投下の承認を求めた際，原爆に頼らなくとも戦局は十分に好転できるとの見解が統合参謀本部では支配的であった。しかし危惧すべき情報に動揺と混乱を来した統合参謀本部も真剣に原爆投下を検討しだしたのである。

こうした中で四月四日にトルーマンは三人の議会指導者達と緊急会談を行った。席上，トルーマンは議会指導者達に原爆投下に向けて政権は最終

⑹ 情報機関による警戒を要する情報について，*op. cit., War and State Terrorism: the United States, Japan, and the Asia-Pacific in the Long Twentieth Century,* Chapter 4, American Airpower and Nuclear Strategy, p. 72.; and Roger Dingman, “Atomic Diplomacy during the Korean War,” *Nuclear Diplomacy and Crisis Management,* (MIT Press, 1990.) p. 135.; and Robert H. Ferrell, *Harry S. Truman: A Life,* Chapter 16: A New Military Forces,(Norwalk, CT : Easton Press, 1997.) p. 348.

段階にあることを伝えると共に，それへの理解を求めた。トルーマンとの会談後，レイバーン（Sam Rayburn）下院議長は，第二次大戦の終結以来，今や米国は最大の危機に直面していると断じた[61]。これによっていやおうなく原爆の投下が遠くないと米国民の多くは実感することになった。

四月六日，ブラッドリー統合参謀本部議長はトルーマンに対し最新の情報を伝えると共に，もしも朝鮮半島の外部から米・国連軍への大規模な攻撃があれば，満州と山東の空軍基地への原爆投下の権限がマッカーサーに与えられるとの統合参謀本部の進言をトルーマンに伝えた[62]。同日，トルーマンは原爆使用についての許諾に署名した[63]。これを受け，米空軍第九爆撃班（the Air Force's 9th Bomb Group）は九発のマークIV（Mark IV）原爆を移送する準備を開始した[64]。四五年八月九日以降，原爆の投下がカウント・ダウンの状態に入ったとされるのはこのときである。

ところが四月一一日にどんでん返しが起きた。マッカーサーは連合国軍総司令部総司令官，朝鮮国連軍総司令官などを含むすべての役職をトルーマンから突然，解かれた[65]。その間に一体，何があったのか。トルーマン

⑹ レイバーンの発言について，*op. cit.,* "Atomic Diplomacy during the Korean War," p. 135.

⑹ ブラッドレーによる進言について，*op. cit.,* "Atomic Diplomacy during the Korean War," p. 136.

⑹ トルーマンの署名について，*Harry S. Truman: A Life,* Chapter 16: A New Military Forces, p. 348.; *op. cit., War and State Terrorism: the United States, Japan, and the Asia-Pacific in the Long Twentieth Century,* Chapter 4, American Airpower and Nuclear Strategy, p. 73.; and *op. cit.,* "Atomic Diplomacy during the Korean War," p. 137.

⑹ この点について，Why Did Truman Really Fire MacArthur? … The Obscure History of Nuclear Weapons and the Korean War Provides the Answer.

⑹ トルーマンによるマッカーサー解任について，Edward L. Daily, *The Legacy of Custer's 7th U.S. Cavalry in Korea*, Chapter 10: Chinese Spring Offensives, (Paducah, KY : Turner Pub. Co., 1990.) p. 106.; David F. Krugler, *The Voice of America and the Domestic Propaganda Battles, 1945-1953,* Chapter 4: Will It in Peoria? The Campaign of Truth, (Columbia : University of Missouri Press, 2000.) p. 131.; *op. cit., United Army in the Korean War,*

をして「アメリカの英雄」の罷免を決断させた直接の契機はマッカーサーとマーチン（Joe Martin）共和党・下院議員との書簡のやり取りであった。トルーマン批判の急先鋒であったマーチンは中国国民党軍の朝鮮出兵を切望する旨の書簡をマッカーサーに送付していた。これに対し諸手を挙げて賛同したマッカーサーはマーチンに返答の書簡を送付した。その中で，マッカーサーはもしもアジア諸国が共産主義勢力の圧力に屈すれば，遠からず西欧同盟諸国もまた共産主義勢力に屈することは不可避であると断言した。このマッカーサー書簡が四月五日にマーチンによって下院で読み上げられた。これだけでもトルーマンを怒らせるに十分であったが，その内容は戦局の行方を決定的に左右しかねないほど戦慄させる重大性を持っていた。中国国民党軍の出兵は中国共産党指導部を激しく挑発することは疑う余地はなく，これに伴い，間違いなく空前規模の中国人民志願軍の介入を呼び込み，米・国連軍側にこれ以上の消耗を引き起こし，これへの最終的な報復措置として中国領土への原爆投下の機会を確実にすることをマッカーサーが目論んだとの推測はあながち見当はずれではなかった。しかも，マッカーサー書簡はトルーマンにとってそれまで重ねてきた不服従の極みであった。マッカーサーの不服従は国家の最高司令官たる大統領の神聖なる権限領域への非礼かつ露骨な介入であり，決して許されざる越権行為であると，トルーマンの目に映った。トルーマンの堪忍袋の尾はついに切れた。ただちに，トルーマンはブラッドレーから了解を得た上で，マッカーサーの解任を決めた。

他方，四月三〇日，ソウルの北方で中朝合同軍の進撃は止まった。毛沢東指導部が中国人民志願軍の大規模介入に踏み切らなかったし，スターリン指導部も爆撃機を発進させなかったので，原爆投下の引き金は引かれることはなかった。しかし，マッカーサー解任後もトルーマンは原爆の使用の可能性を隠そうとはしなかった。後任のリッジウェイに全幅の信頼を置

Policy and Direction: The First Year, Chapter XX: The Relief of MacArthur, p. 365.; and *op. cit.,* "Atomic Diplomacy during the Korean War," pp. 137–139.

いたトルーマンは朝鮮半島の外から大規模な空爆があった場合の報復として司令官の裁量で原爆使用を行う権限をリッジウェイに授権した。これを受け，リッジェイはあたかも原爆投下が必要でもあるかのように原爆投下の許諾請求を繰り返し行った[66]。

その後，一九五一年九月から一〇月にかけ「ハドソン港作戦（Operation Hudson Harbor）」と銘打った原爆投下演習が繰り返し行われた[67]。「ハドソン港作戦」では，ダミーの原爆を搭載したB-29爆撃機が沖縄の嘉手納空軍基地から投下目標地点の北朝鮮上空まで飛行するといった演習が幾度となく実施され，同年七月に始まった休戦会談での譲歩を引き出すために中朝合同軍への軍事的圧力を加えたのである。

⑹ 例えば，一九五一年五月に三八発もの原爆の使用をリッジウェイも要請している。リッジウェイの原爆使用許諾要請について，*op. cit.,* “Why Did Truman Really Fire MacArthur? … The Obscure History of Nuclear Weapons and the Korean War Provides the Answer.”

⑺ 「ハドソン港作戦」について，Appu Kuttan Soman, *Nuclear Diplomacy in Unequal Conflicts: the United States and China, 1950-1958,* Chapter 3: the Limits of Nuclear Coercion: Nuclear Diplomacy in Korean War, (Westport, Conn. : Praeger, 2000.) p. 78.; and Nina Tannenwald, *The Nuclear Taboo: the United States and the Non-use of Nuclear Weapons since 1945*, Chapter 4: The Korean War: Emerging Nuclear Taboo, (Cambridge : Cambridge University Press, 2007.) p. 134.